【　復活のトロパリ　第５調　】



【　日本の亜使徒聖ニコライのトロパリ　第４調　】





【　日本の亜使徒聖ニコライのコンダク　第４調　】




きをぞくしんのことなし、かれらにか
屬神子爲彼等神
みのおんちょうをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて
恩寵與教會建
たり、いまこのきょうかいのためにいのり
今此教會爲祈
たまえ、けだしわれらそのしょしはなん
給蓋我等其諸子爾
ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
呼我善牧者慶
べよ。

【　復活のコンダク　第５調　】


いまもいつもよよに、アミン。
今何時世世
わがきゅうせいしゅ、ひとをあいするしゅ
我救世主人愛主
よ、なんぢはぢごくにくだり、ぜん
爾地獄降全
のうしゃとしてそのもんをやぶり、ぞう
能者其門壞造
せいしゅとして、ししゃをおのれとともに
成主死者己偕

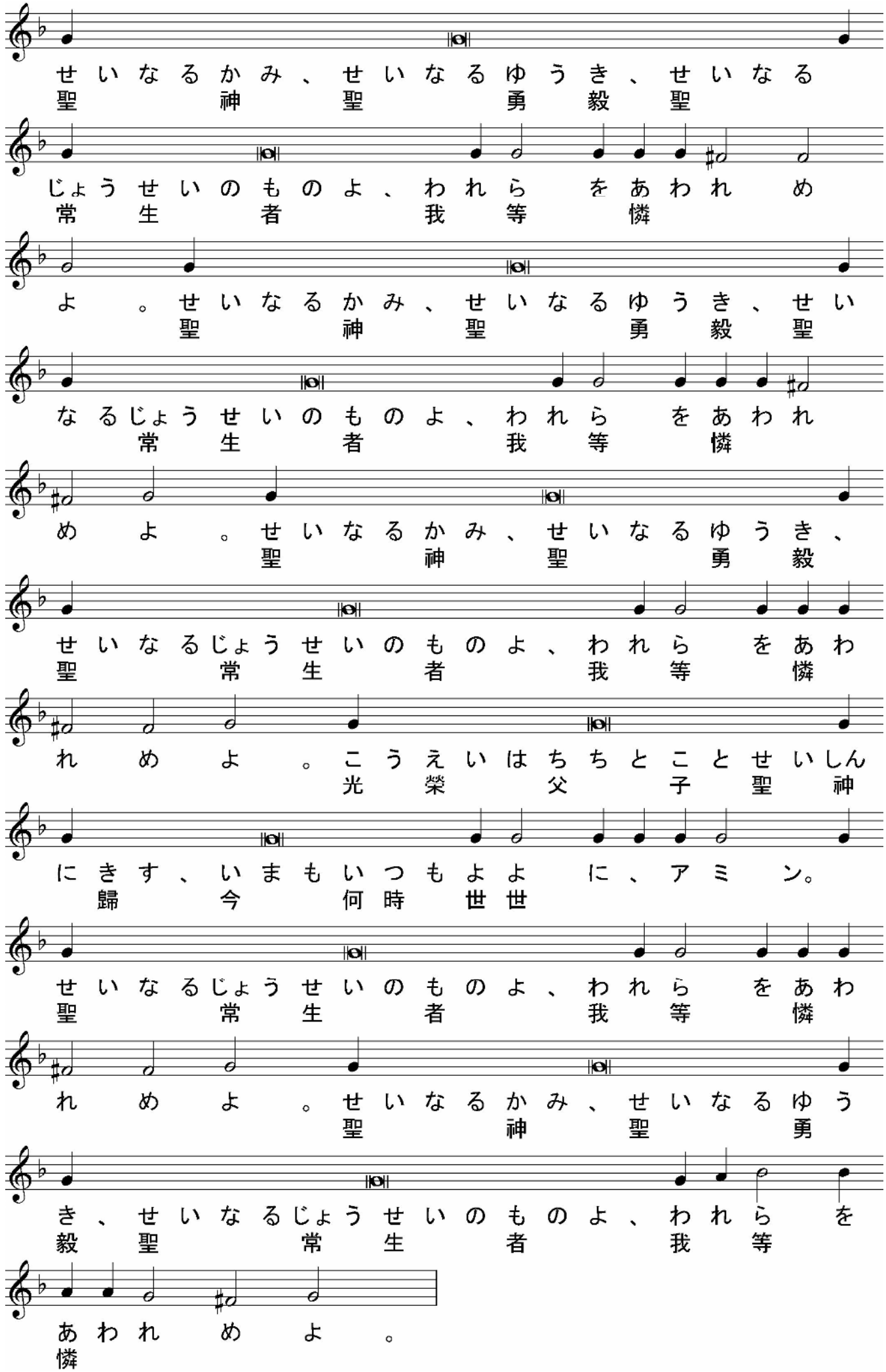


司祭)（ 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行う者を棄てずして、其救の爲に痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讃榮を奉るに堪うる者となしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 ）

司祭) **蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、**



【 聖三祝文 】


せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
聖神聖勇毅聖
じょうせいのものよ、われらをあわれめ
常生者我等憐
よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
聖神聖勇毅聖
なるじょうせいのものよ、われらをあわれ
常生者我等憐
めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
聖神聖勇毅
せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
聖常生者我等憐
れめよ。こうえいはちちとこせいしん
光榮父子聖神
にきす、いまもいつもよよに、アミン。
歸今何時世世
せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
聖常生者我等憐
れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
聖神聖勇
き、せいなるじょうせいのものよ、われらを
毅聖常生者我等
あわれめよ。
憐

司祭)（ 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、 ）

【 提綱 主日第５調 】

司祭) 愼みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、第五の調、主よ、爾は我等を保ち、我等を護りて、斯の世より永遠に至らん、



誦經) 主よ、我を救い給え、蓋義人は絶えたり、



誦經) 主よ、爾は我等を保ち、我等を護りて、



【　使徒経（アポストロス）　215端　ガラティヤ書6章11節～18節　】

司祭）　睿智（えいち）、

誦經）　聖使徒パヴェルがガラティヤ人（じん）に達（たつ）する書（しょ）の讀（よみ）、

司祭）　謹（つつし）みて聽（き）くべし、

誦經）　兄弟（けいてい）よ、視（み）よ、我手（わて）づから爾等（なんぢら）に幾許（いくばく）か多（おお）く書（しょ）したるを。肉（にく）を以（もつ）て誇（ほこ）らんと欲（ほつ）する者（もの）が、爾等（なんぢら）を強（し）いて割禮（かつれい）を受（う）けしむるは、唯（ただ）ハリストスの十字架（じゅうじか）の故（ゆえ）に由（よ）りて窘逐（きんちく）を受（う）けざらん爲（ため）のみ。蓋（けだし）割禮（かつれい）を受（う）くる者（もの）は、己（おのれ）も律法（りつぽう）を守（まも）らず、然（しか）るに爾等（なんぢら）に割禮（かつれい）を受（う）けしめんことを欲（ほつ）するは、爾等（なんぢら）の肉（にく）を以（もつ）て誇（ほこ）らん爲（ため）なり。我（われ）に在（あ）りては、我等（われら）の主（しゅ）イイスス・ハリストスの十字架（じゅうじか）の外（ほか）に誇（ほこ）る所（ところ）なし、此（これ）に由（よ）りて世（よ）は我等（われら）の爲（ため）に釘（てい）せられたり、我（われ）世（よ）に於（おい）ても亦（またしか）然（さ）り。蓋（けだし）ハリストス・イイススに在（あ）りては、割禮（かつれい）を受（う）くるも、割禮（かつれい）を受（う）けざるも益（えき）なく、惟（ただあらた）新（あら）なる受造物（じゅぞうぶつ）は益（えき）あり。凡（およ）そ此（こ）の規（のり）に遵（したが）いて行（おこな）う者（もの）は、願（ねが）わくは平安（へいあん）と慈憐（じれん）とを蒙（こうむ）らん、神（かみ）のイズライリも亦（またしか）然（さ）り。今（いま）より後（のち）人（ひと）我（われ）を擾（わづらわ）す勿（なか）れ、蓋（けだし）我（われ）は主（しゅ）イイススの瘡痍（きず）を我（わ）が身（み）に負（お）えり。兄弟（けいてい）よ、願（ねが）わくは我等（われら）の主（しゅ）イイスス・ハリストスの恩寵（おんちょう）は爾等（なんぢら）の神（しん）と偕（とも）に在（あ）らんことを、アミン。

＊＊

（比較用　口語訳）兄弟たちよ。ごらんなさい。わたし自身いま筆をとって、こんなに大きい字で、あなたがたに書いていることを。いったい、肉において見えを飾ろうとする者たちは、キリスト・イエスの十字架のゆえに、迫害を受けたくないばかりに、あなたがたにしいて割礼を受けさせようとする。事実、割礼のあるもの自身が律法を守らず、ただ、あなたがたの肉について誇りたいために、割礼を受けさせようとしているのである。しかし、わたし自身には、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇とするものは、断じてあってはならない。この十字架につけられて、この世はわたしに対して死に、わたしもこの世に対して死んでしまったのである。割礼のあるなしは問題ではなく、ただ、新しく造られることこそ、重要なのである。この法則に従って進む人々の上に、平和とあわれみとがあるように。また、神のイスラエルの上にあるように。だれも今後は、わたしに煩いをかけないでほしい。わたしは、イエスの焼き印を身に帯びているのだから。兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にあるように、アァメン。

＊＊

【　アリルイヤ　主日第5調　】

司祭）　爾（なんぢ）に平安（へいあん）、

誦經）　爾（なんぢ）の神（しん）にも、

司祭) 睿智(えいち)、

誦經) アリルイヤ、



誦經) 主(しゅ)よ、我(われ)永(なが)く爾(なんぢ)の慈憐(じれん)を歌(うた)い、我(わ)が口(くち)を以(もつ)て世世(よよ)に爾(なんぢ)の眞實(しんじつ)を傳(つた)えん、



誦經) 蓋(けだし)我言(われいわ)う、慈慈(じれん)は永(なが)く建(た)てられたり、爾(なんぢ)は爾(なんぢ)の眞實(しんじつ)を天(てん)に固(かた)めたり、



司祭) (黙誦: 人(ひと)を愛(あい)する主宰(しゅさい)よ、我(わ)が心(こころ)に神(かみ)を知(し)る智慧(ちえ)の浄(いさぎよ)き光(ひかり)を輝(かがや)かし、我(わ)が思念(しねん)の目(め)を啓(ひら)きて、爾(なんぢ)が福音(ふくいん)の教(おしえ)を悟(さと)らしめ給(たま)え、我(わ)が衷(うち)に爾(なんぢ)の福(ふく)たる誡(いましめ)を畏(おそ)るる畏(おそれ)をも入(い)れて、我等(われら)が悉(ことごと)くの肉體(にくたい)の慾(よく)を踏(ふ)み、凡(およ)そ爾(なんぢ)の喜(よろこ)ぶ所(ところ)を思(おも)い且(か)つ行(おこな)いて、屬神(ぞくしん)の生活(せいかつ)を過(す)ぐるを致(いた)させ給(たま)え、蓋(けだし)ハリストス神(かみ)よ、爾(なんぢ)は我(わ)が靈(たましい)と體(からだ)との光照(こうしょう)なり、我等(われらなんぢ)爾(なんぢ)と爾(なんぢ)の無原(むげん)の父(ちち)と至聖至善(しせいしぜん)にして生命(いのち)を施(ほどこ)す爾(なんぢ)の神(しん)とに光榮(こうえい)を獻(けん)ず、今(いま)も何時(いつ)も世世(よよ)に、アミン。)

【 福音經(エヴァンゲリオン) ルカ福音書 35 端 8 章 5～15 節 】

司祭) 睿智(えいち)、肅(つつし)みて立(た)て聖福音經(せいふくいんけいき)を聽(き)くべし、衆人(しゅうじん)に平安(へいあん)、



司祭）ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭） 謹みて聽くべし、主は左の譬を設けて曰えり、播く者は其種を播かん爲に出でたり、播く時路の旁に遺ちし者あり、乃踐まれたり、又天空の鳥之を啄めり。石の上に遺ちし者あり、萌え出でて稿れたり、潤澤なきが故なり。棘の中に遺ちし者あり、棘共に長びて、之を蔽えり。沃壤に遺ちし者あり、萌え出でて、實を結ぶこと百倍せり。之を言いて呼べり、耳ありて聽くを得る者は聽くべし。其門徒彼に問いて曰えり、此の譬は何ぞ。彼曰えり、爾等には神の國の奥義を知ること與えられたれども、他の者には譬を用いる、彼等視れども見ず、聽けども悟らざる爲なり。此の譬の義は左の如し、種は神の言なり。路の旁の者は、是れ聽けども、後惡魔來りて、其心より言を奪う、彼等が信じて救われざらん爲なり。石の上の者は、是れ聽く時喜びて言を受くれども、己に根なくして暫く信じ、誘惑の時に背く。棘の中に遺ちし者は、是れ聽きて去り、而して度生の慮と貨財と宴樂とに蔽われて、實を結ばず。沃壤に遺ちし者は、是れ言を聽きて、清潔良善なる心に之を守り、忍耐して實を結ぶ。之を言いて呼べり、耳ありて聽くを得る者は聽くべし。

＊＊

比較用　口語訳）主は一つの譬で話をされた、「種まきが種をまきに出て行った。まいているうちに、ある種は道ばたに落ち、踏みつけられ、そして空の鳥に食べられてしまった。ほかの種は岩の上に落ち、はえはしたが水気がないので枯れてしまった。ほかの種は、いばらの間に落ちたので、いばらも一緒に茂ってきて、それをふさいでしまった。ところが、ほかの種は良い地に落ちたので、はえ育って百倍もの実を結んだ」。こう語られたのち、声をあげて「聞く耳のある者は聞くがよい」と言われた。弟子たちは、この譬はどういう意味でしょうか、とイエスに質問した。そこで言われた、「あなたがたには、神の

国の奥義を知ることが許されているが、ほかの人たちには、見ても見えず、聞いても悟られないために、譬で話すのである。この譬はこういう意味である。種は神の言である。道ばたに落ちたのは、聞いたのち、信じることも救われることもないように、悪魔によってその心から御言が奪い取られる人たちのことである。岩の上に落ちたのは、御言を聞いた時には喜んで受けいれるが、根が無いので、しばらくは信じていても、試錬の時が来ると、信仰を捨てる人たちのことである。いばらの中に落ちたのは、聞いてから日を過ごすうちに、生活の心づかいや富や快楽にふさがれて、実の熟するまでにならない人たちのことである。良い地に落ちたのは、御言を聞いたのち、これを正しい良い心でしっかりと守り、耐え忍んで実を結ぶに至る人たちのことである。

＊＊



※　聖体礼儀③（金口イォアン）へ